

夏秋きゅうり新規栽培者向け【一步先行く作業のポイント 7月】

◎ 追肥

○ 養分吸収

・雌花が開花し果実肥大が始まる定植後6週間後頃から養分の吸収が急増し、養分欠乏が起こりやすくなるため、追肥は遅れずに行います。

○ 追肥の目安

・10アールあたり10トン収穫した際の吸収養分(kg)は N-P-K:29-9-38

・1トン生産に必要な吸収窒素は10アールあたり約3kg

【レベル1】一定量を定期的に追肥します。

⇒例)5~10日間隔で10アールあたり窒素・カリの成分量で1~2kgの追肥を行います。

【レベル2】収量に応じて追肥します。

⇒例)1日20コンテナ(約200kg)収穫した場合、1日当たりの吸収養分は

窒素約580g、リン酸約180g、カリ約760gとなるため、この量を追肥します。

◎ 高温期を乗り切る対策(梅雨明け後のきゅうりへの影響と対策)

梅雨明け後のきゅうりへの影響	対 策
<p>きゅうりの生育限界の<u>高温</u>を超える時間が長くなる。</p> <p>→ <u>株のしおれ</u></p> <p>夜温が下がらず、<u>気温の日較差</u>が小さい</p> <p>→ <u>節間の徒長、果実の奇形</u></p>	<p>①<u>奇形果の摘果</u>：曲がり果、尻太果、尻細果などの奇形果は、確認次第小さいうちに摘果する(大きくなって治らない)。</p> <p>②<u>枝の更新</u>：勢いの強そうなつる「カ枝」をいくつか確保するとともに、節間が徒長し、細長い果実が増え、勢いが低下したつるは切り戻し、「カ枝」に切り替える。</p> <p>③<u>摘葉</u>：濃緑色で硬く大きい葉は展開後40日以上経過し、光合成能力が低下しているため、遅れずに摘み取る(日陰を作り、風通しも悪くなり、病害も発生しやすくなる)。</p>
<p><u>降水量</u>が少ない・干ばつ</p> <p>→ <u>株のしおれ、果実の奇形</u></p>	<p>①<u>かん水の実施</u>：真夏の晴天日には1株当たり約4リットルの水分が蒸散するともいわれるので、かん水を行うこと。</p> <p>【かん水の時間】朝から午前中が原則</p> <p>【かん水の方法】パイプやチューブ、ほ場の乾燥程度によってはうね間に流し込む</p> <p>【かん水量】1回に多量に行わず、こまめに行う。滞水させない(長時間滞水すると根に障害が発生。水田跡地は要注意)。</p> <p>②<u>かん注の実施</u>：根のそばに直接届くので反応が早く、有効な手段。液肥と共に酸素供給剤を加えると効果的。</p>
<p><u>日射</u>が強い</p> <p>→ <u>抑制作型では茎葉自体の温度上昇による「焼け」症状</u></p>	<p>①<u>遮光資材の活用</u>：遮光により日射量を抑える。</p> <p>②<u>細霧冷房</u>：葉面温度を低下させる。</p>